

日野強『伊犁紀行』における漢詩

Written characters are shared by East Asian countries and a symbol of mutual understanding. We consider the Chinese poems scattered widely through the account of a Japanese military officer's expedition in the Uighur region of China.

董 炳月

Dong Bing Yue

中国社会科学院教授 (China)

要旨

1906 年から 1907 年にかけて、日本陸軍少佐日野強^{ひのつとむ}（1866—1920）は新疆の探検調査を行った。その結果が 1909 年 5 月に出版された探検旅行記『伊犁紀行』である。このことは明治天皇に知られ、日野は「御前講演」の名誉をいただいた。『伊犁紀行』は文学的テキストでもあり、紀行文としての文体とそこにおける漢詩も注目に値する。そのなかには日野本人の 33 首の漢詩が収録され、中国側の文武官員の唱和詩も 76 首収録された。日野の漢詩は実質的に「異郷における明治文学」でもある。漢詩は明治期の「東亜」の形成において特殊な役割を果たし異彩を放った。

キーワード 大陸雄飛、漢詩、新疆探検

はじめに——

『伊犁紀行』の成立と文学性

1906（明治 39）年 7 月下旬、日本陸軍参謀本部は少佐日野強^{ひのつとむ}（1866—1920）に清国新疆での情報収集の内命を下した。中央アジアの歴史文化の研究者である金子民雄によれば、当時日本軍上層部が新疆に関心を寄せた背景には、ロシアが日露戦争敗北後、勢力を中国東北地方から中央アジアへ移し、中国北西部国境の日増しに複雑になりつつある情勢があった。同地の情勢を正確に把握するため、参謀本部は日野を新疆省都ウルムチから遠いロシアとの国境にある伊犁まで派遣し、情報収集を命令した¹⁾。同年、日野強は 42 歳、重任を任命された理由は彼の特異な履歴と結び付いている。1889 年、日野は 24 歳で陸軍士官学校を卒業し、歩兵少尉になった。1894 年の日清戦争開戦時、すでに中尉に昇進した

日野は、所属部隊とともに海を渡り、釜山^{プサン}に上陸し、朝鮮半島、中朝辺境を転戦した。戦争終結後は大連から船で日本に帰国した。1902 年 7 月 1 日、日本陸軍参謀本部はいずれ起こる日露戦争の準備を進め、大尉に昇進した日野を中国東北の朝鮮辺境へ派遣し、情報収集に従事させた。日野は中朝の国境で中国人スパイを用いて工作を展開し、優れた成果を上げ、この年から 10 年以上の長きにわたる特務生活を始めることになる。1904 年 2 月、日露戦争が開戦すると、日野は直ちに先頭部隊の一員として鴨緑江を渡り、昌城を占領した。続いて遼陽会戦、沙河会戦などの重要な戦役に加わり、そして沙河会戦の最中に少佐に昇進し、歩兵第三十連隊大隊長に任命された。1905 年 9 月、日露戦争が終結すると、日野は所属部隊とともに日本に凱旋し、功四級金鷄勲章を受けた²⁾。このように百戦練磨でスパイ工作の経験豊富な、そして中国語を解する日野は、まさ

に新疆の情報収集には適材の人物であった。

日野は参謀本部の内命を受け、直ちに新疆関連資料の収集に着手したが、東京で入手できる資料は限られていたため、9月7日に東京を発って北京へ向かい、20日に北京に到着し、約3週間かけて準備を進めた。1906年10月13日午前7時15分、汽車で北京を出発し、1年と14日間の新疆考察の旅に出た。鄭州、西安、蘭州、安西を経由して新疆に入り、新疆では天山北側のウルムチ、烏蘇^{ウス}、タルバハ台、伊犁、天山南側のハミ、庫車^{クチャ}、カシュガル、ヤルカンド等を踏査した。カラ崑崙を越えてインド領のスリナガルに到着したのは、1907年10月27日であった。日野はインドで1ヵ月近く休養し、11月23日に船でカルカッタを離れ、シンガポール、上海を経由して日本に帰国し、12月25日に東京に到着し復命した。

この特殊な探検旅行は明治天皇の耳に入り、日野は御前講演の栄光を賜った。探検旅行から1年半後の1909年5月29日、旅行記『伊犁紀行』は博文館より出版された。この本は上下2巻からなり、上巻「日誌の部」は行程に沿い日々途上の見聞や感想を記録し、下巻「地誌の部」は沿道各地の自然、社会、民族、宗教、教育、行政などに区別され、各状況を記述している。

日野強の新疆探検と旅行記『伊犁紀行』の歴史的な価値については、すでに学术界で評価がなされてきた。長沢和俊は『日本人の冒険と探検』の中で次のように指摘している。「彼の中央アジア横断は、当時のことであるから、むろん軍事探偵的な要素もあったであろうが、とにかく明治時代の軍人としては地理、歴史、風俗、慣習などにきわめて精細な観察を試みており、その旅行記『伊犁紀行』上下2巻は、現在でも不朽の価値をもつ探検記の一つであると言える」³⁾。また金子民雄は『『伊犁紀行』は旅行史の上からみると古典的名著である』と述べている⁴⁾。新疆地区の地理、社会、民族、言語、歴史、風土などを詳しく記録した『伊犁紀行』は、まさに清末の新疆の百科事典と言えよう。

しかし、『伊犁紀行』の文学的な価値は未だ研究者の視野に入っていない。実際のところ、旅行記である『伊犁紀行』はまた文学テキストでもある。言うまでもなく、旅行記そのものが文学ジャンルを形成している。特に日本文学では、紀行文は文学の起源であるのみならず、文学史における重要な流れを成している。紀貫之の『土佐日記』(953年頃完成)は最初の仮名日記で、また紀行文学であり、松尾芭蕉の『奥の細道』は日本紀行文学の傑作である。この意味において、旅行記である『伊犁紀行』はまた文学作品である。最も重要なのは、『伊犁紀行』は散文と詩との二つの形式が結合する形で記録されており、膨大な詩が含まれていることである。これらの詩はテキストの有機的な構成部分を成している。

『伊犁紀行』の中の詩は全て旧詩、つまり漢詩であり、三種類に区分することができる。第一は、日野が沿道の歴史地理について述べる時に引用する中国の古詩であり、第二は、日野本人が旅の途上で詠んだ漢詩であり(全33首)、第三は、沿道で出会った中国人官僚や名士が日野に贈った、或いは日野と唱和した詩作である。先の二つは、『伊犁紀行』の沿道の社会状況、歴史地理、風土に関する記録の中に織り混ぜられており、三つ目は独立し、「新疆瓊瑤^{けいよう}」と題して上下2巻の最後に付されている。本論はこの三種類の漢詩を論ずるものである。

1 歴史の記憶としての中国古代詩

日野強は1906年10月13日朝に北京を発ち、新疆探検の旅に出たが、出発当日の旅行記には早々と中国の古詩が現れる。それは『戦国策・燕策』の「易水歌」である。途中で経由する定興という町に着くと、日野はこのように書いている。「これはすなわち涿州城にして、三国時代には、涿鹿あるいは永秦と称し、蜀の劉備が出生の地として、今なおその碑^{かつ}碣を存すという。また次駅の高碑店^{カオバイ}は、列車の給水所^{シーリン}にして、西陵線の分岐点たり。定興城は停車場の^{ヂンシン}」

北方千二三百メートルのあたりに在り。この地往年はんよう範陽と称し、かの古壮士が風蕭蕭としてと悲歌慷慨したる易水イーシュイ（今は涑水ライシュイと称す）は、駅の西南に幅約百メートルばかりの流れをたたえて、古代の歴史を語るものの如し」⁵⁾。つまり、日野は地理を見る時に歴史的な眼差しを用い、また詩情を抱いている。

彼の記述では、歴史、歴史上の人物が詠んだ詩、及び目の風景の三者が入り混じっている。当時当地で荊軻の詩「風蕭蕭として易水寒し、壮士ひとたび去って復還らず」を思い起こしたのは、或る意味、自己の比喻でもあるはずだ。時あたかも秋で、彼が目にしたのは蕭蕭と吹く秋風の中の易水であり、そして彼自身も単独で長旅に出、日本帝国のためただ一人遙かなる新疆へ情報収集に赴くには、「壮士ひとたび去って復還またらず」の気概が必要なのであった。

河北省から河南省に入り、10月30日に日野は靈宝から函谷関に到着した。北京出発後の旅行体験と見聞を総括する時、彼は中原地方（現在の河南省、陝西省あたり）の荒涼とした風景と貧困に感嘆し、旅行記の中で次のように記している。「彼等が円満絶対と称する唐虞無為とうぐの時代はしばらくおき、版図広大、文物隆昌なる李唐の盛時にあたり、劉廷芝が白頭を悲しむ翁に代るの一篇は、当時の状況を窺うに足るもの有るとともに、また現時の状況を諷りゅうきせしに似たり」⁶⁾。劉廷芝（651-679）とは劉希夷であり、彼は汝州（現在の河南省臨安県）の生まれで、名詩「代悲白頭翁」の中の名句「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」は人口に膾炙かいしやし、広く親しまれている。日野は世の転変に対する自己の感慨を表現するのに劉廷芝の詩を用いている。

日野はさらに函谷関から臨潼へ向かい、楊貴妃で知られる華清宮を見学し、風呂に入った。この経験を記録する時、彼はこのように書いている。「王維が太常韋主簿五郎温泉の寓目に和するの詞を誦し来れば、如何に当時の壯觀なりしかを知るに足る。『秦川の一半夕陽開』依然その景は在るも『青山尽是朱旗繞』は更に夢にだに見るべくもあらず。然れ

ども独り温泉のみ今に存し、浴客日日きん麇集す。予もまた之に浴みて、渡清以来の垢を洗う」⁷⁾。ここでは日野は王維の詩を用いて眼前の景色を描いており、その描写の中には歴史と現実の転換と対比が語られている。

11月6日、日野強は臨潼を去り古都西安に着く。かつて東は臨潼まで、西は咸陽までの広さを誇った古都西安は、今は零落し、四里四方に過ぎないほど小さくなっていった。日野はこのような西安について記録する時、盧照鄰（635-689頃）の名詩を借りて自己の感情を表現する。盧の「長安古意」をそのまま引用し、「節物風光不相待、滄海桑田須臾改、昔時金階白玉堂、只今惟有青松在」と記す。西安滞在中、日野は大慈恩寺へ行き、大雁塔を見学する。寺と塔に関する記録の中で、彼はこれらの精美で莊嚴な様を賛美し、「岑参が五言古詩は、その実況実景を写して遺憾なし、掲げて予の秃筆を省く」と述べ、岑参の詩をそのまま引用する。「青松夾馳道、宮觀何玲瓏」などと引用したのち、日野は「今は青松本道を夾み、宮觀の玲瓏たるもの無きも、当時の盛觀は今なおそのおもかげを存し、岑参が形容の誇大ならざるを認む」⁸⁾と記している。

日野は西安を去りさらに西へ進み、探検旅行を続け、旅行記を書き続けるが、1ヵ月半、中国の古詩を借りて記録を綴る、或いは感情を述べることはなかった。中国古詩が再び彼の旅行記に現れるのは、12月下旬に蘭州の西部に着いた時のことである。その一帯の長城の沿革を述べる時、『焉知万里連雲色、不及堯階三尺高』と詞人をして嘲笑せしめし万里の長城は、人みな秦の始皇の創築に係ると思えるも、実は始皇が創意にあらず、また秦時に完成したるものにあらずして遠く戦国時代に始まり」と記し、唐の詩人張載の「長城」を引用した⁹⁾。同地から再び西へ向かい、1907年1月6日に玉門関に着いた。『伊犁紀行』の中には「玉門関の懷古」という一節があり、その中では王昌齡の「從軍行」を次のようにそのまま引用している。「玉門関は秦、漢、唐以来、中外の辺境にして、詞客の口に上る者

少なからず。唐の王昌齡が従軍行の一にも『青海長雲暗雪山、孤城遙望玉門関、黃砂百戰穿金甲、不破樓蘭終不還』。明の代、その辺防に薄弱なるにより、特に嘉峪関を設けて支持せりという」¹⁰⁾。『伊犁紀行』の中で中国古詩が1首そのまま引用されるのは、同詩が最後である。約半年後の6月下旬、伊犁から天山を越えて新疆南部へ行く途中、天山奥地の巴彥布拉克^{バヤンブラック}を出発する時、日野は「『今夜不知何処宿、山川万里絶人煙』の感あり」と語る。『伊犁紀行』の中で中国古詩が部分的に引用されるのはこれが最後であり、これは唐の詩人岑参『磧中作』の二句を引用したものであった¹¹⁾。

以上の総括から分かるように、日野は唐詩に非常に詳しく、引用した劉廷芝、王維、盧照鄰、岑参、王昌齡はいずれも唐の詩人であり、日野は彼らの詩作を気ままに手に取り、景色を描写し、物を描き、事柄を述べ、感情を述べる際に用いている。彼は唐詩の記憶をもって伊犁探検の旅を進め、唐詩を用いて現実と歴史の間である種の関係（同一或いは転換）を結び、自己の紀行文に中国伝統文化の含蓄と歴史の深みをもたらしめているのである。彼が身を置く清末の中国と盛唐の中国の状況は雲泥の差であり、唐詩を借用して表わした感情はおおよそ追憶と世の転変に対する悲哀である。このような追憶と悲哀は彼の「旅愁」の重要な構成部分である。『伊犁紀行』の中で、「懷古」という言葉が何度も繰り返される（「長安懷古」、「玉門関懷古」など）理由はここにある。言うまでもなく、日野強の「懷古」は、時間的な今昔に対する感慨だけではなく、それ以上に、彼の現実の中国に対する絶望を表しているのである。

2 日野強の漢詩における中国の痕跡

『伊犁紀行』で、日野強本人が詠んだ最初の漢詩は、1906年10月19日に関する記録の中にある。この日、彼は北京を発ってからすでに1週間が経つ

ており、滎陽に到着した。滎陽城はかつて漢の高祖劉邦と楚の霸王項羽との激戦地であり、この地に身を置いた日野は懷古の情を抱き、1首の漢詩を綴った。「拔山蓋世万人雄、海内誰能敵乃公、忽下虞兮數行淚、八千子弟一時空」。滎陽から日野は探検の途中で折々漢詩を創作し、これらの漢詩は『伊犁紀行』の重要な構成部分を成している。『伊犁紀行』では、日野が詠んだ漢詩は全部で33首あり、その中の31首は上巻「日誌之部」に記され、下巻「地誌之部」には2首のみが綴られている。これは上下2巻の叙述の形式が異なるためである。

上巻は「日誌」として日記形式の紀行文の特徴を有し、下巻は「地誌」として知識的な内容を主とする。日野の漢詩は主に途中の見聞や体験などを書き表し、記録と密接に関わっているため、「日誌之部」の不可欠な要素となっている。上巻「日誌之部」で日野が綴った最初の漢詩は上述の通りだが、最後（第31首）の漢詩は次の通りである。「天山南北訪仙源、又越崑崙敲佛門。自笑佛緣猶未盡、再騎鼉背向鄉園」。¹²⁾ 上巻の記述は同詩で締めくくられている。漢詩の位置、及び漢詩の末句から、1907年11月23日にインドのカルカッタから乗船し、日本に帰国する際の作だと判断できる。下巻「地誌之部」の中の2首は、砂漠旅行の知識を説明する際に補足として記されたものである。昼夜、および季節間の砂漠の変化を述べてから、日野は「砂漠通過の途上、漫吟數首あり、左に録して記事の不足を補わんとす」と記し、自作の2首を綴る。「七絶」（7文字で4句）と「七律」（7文字で8句）各1首である。

星泊沙洲慰此身、瀚海茫茫夜渡津。漫笑晨昏任顛倒、縱橫世界本天真。

遍歷秦隴已幾旬、辺関西去客心新。一輪水月照瀚海、七点星光示渡津。

積雪滿山迷紫塞、朔風刮地起黃塵。峭寒徹骨驚遊夢、感我通宵独苦吟。¹³⁾

これらの漢詩の中では、砂漠の風景と彼個人の砂漠での体験が詩的な表現で語られている。このような表現は、知識的な説明に対する有効な補完となっている。日野が「砂漠通過の途上、漫吟数首あり」と述べていることから考えれば、彼が探検の途中で綴った全ての漢詩が『伊犁紀行』に収められた訳ではないと考えられる。

漢詩の形式により分類すると、『伊犁紀行』における日野の33首の漢詩の中では、七絶が最も多く、25首ある。他に七律5首、五絶（5文字で4句）が3首ある。詩の内容やモチーフから見れば、懷古と抒情の詩作が最も多く、少なくとも15首はこの類型に属し、33首の半分近くを占めている。この意味において、先に引用した日野が最初に詠んだ漢詩はモデルとなっている。日野は滎陽城に身を置き、かつての劉邦と項羽の激戦、及び項羽の惨めな終焉に思いを馳せ、七絶1首を綴り、世の転変に対する感慨を表現したのである。これ以後に創作した懷古・抒情詩は、大体このモデルに沿って書き上げられている。つまり、「歴史事件の発生地に身を置き、昔の出来事を想起し、風景を描写して抒情」する。

『伊犁紀行』の中で日野が創作した33首の漢詩の中で、最も優れているのはこれらの懷古・抒情詩である。例として臨潼で詠んだ七律1首を見てみよう。「西上長安数十程、夕陽下馬浴華清。渭河水落微漁火、秦嶺月高多鹿鳴。過雁斜排一字陣、啼鴉寒作六宮聲。余香千載猶溫膩、也為行人濯佩旌。¹⁴⁾ 韻律は流暢で、対句は整然とし、作品としてよく出来ている。韻律が流暢であるのは中国語の発音で読まなければ分からない。更に重要なのは、叙事、景色の描写と抒情がごく自然に融合しており、典故が天衣無縫に使用されていることである。真ん中の4句は景色を描写し、視覚と聴覚、「動」（動き）と「静」（静けさ）など多種の要素を含み、空間に広がりをもたらし、趣が深い。首聯（最初の2句）と尾聯（最後の2句）が合わさることにより、さらに多重の空間と時間の転換を示している。

本来、日本の漢詩は漢字文化と中国古詩の影響から生まれたものであり、日本人である日野が探検の途上で作った漢詩は、当然ながら中国の歴史と文化の要素をもっとも多く含んでいる。このような要素は至るところに見られる。老子、項羽、楊貴妃、西王母、秦の始皇帝、漢の武帝などはみな、日野の漢詩に登場し、さらに近代の新疆に大きな影響を与えた左宗棠さえも日野の創作の対象となる。詩の範囲に限って見れば、日野の漢詩は中国古詩から多方面の影響を受けている。「拔山蓋世万人雄」という詩においては、最初の句が項羽の詩「垓下の歌」の冒頭句「力拔山兮氣蓋世」を下敷きにしているほか、詩の全体の雰囲気も非常に「垓下の歌」に似ている。日野の漢詩と並べて見ると、共に世の転変に対する感慨が読み取れる。この意味において、日野の漢詩は「垓下の歌」の焼き直しとも言えよう。

しかし、日野の漢詩に最も大きな影響を与えていたのは依然として唐詩である。『伊犁紀行』で日野が詠んだ33首の漢詩の中では、七言詩（1句は7文字からなる）が最も多い。七絶25首と七律5首と全部で30首であり、33首の90パーセントを占める。明らかに、七言詩は日野が得意とする、そして好む形式である。この形式の選択そのものは、唐詩の影響だと見なせる。なぜなら、七言詩という形式は唐の時代において完成され、輝かしい成果を得ているからだ。本論の第1章で触れた、日野が引用した唐の詩人は、いずれも七言詩の達人であった。日野は唐詩を熟読した上で無意識のうちに自らも七言詩の作り手になったのであろう。第1節のまとめで示したように、日野が風景を描写し、自らの感情を綴った時に引用したのは、ほぼ全て唐詩であった。これも彼が唐詩から大きな影響を受けた表れの一つである。

日野強の漢詩を唐詩という背景の中に置いて考察すると、多くの直接的な影響の痕跡が発見できる。前文に引用した「西上長安数十程」の1首は、明らかに王維「和太常韋主簿五郎溫泉寓目之作」の影響を受けている。日野の記述から分かる事実は、彼

が王維のこの詩を吟唱してから「西上長安数十程」を創作したことである。王維の詩は「漢主離宮接露台、秦川一半夕陽開。青山尽是朱旗繞、碧澗翻從玉殿來。新豐樹里行人度、小苑城邊獵騎回。問道甘泉能獻賦、懸知獨有子云才」と七律であった。詩は8句からなるが、日野はそのうち「秦川一半夕陽開」と「青山尽是朱旗繞」の2句を引用した。興味深いことに、この2句の基本的なイメージ（中国語のいわゆる「意象」）はほぼ日野が詠んだ漢詩の全ての中に現れる。「夕陽下馬浴華清」は「夕陽」を描き、「渭河水落微漁火」の「渭河」は言うまでもなく「秦川」の流れの一つである。「秦嶺月高多鹿鳴」の「秦嶺」は王維の詩の中の「青山」に重なり、「也為行人濯佩旌」の「佩旌」はまた王維の詩の中の「朱旗」と同一性がある。

日野の漢詩は、中国の歴史文化の要素を取り入れ、中国の古詩から韻律や含蓄などの方面において影響を受けることにより、中国古詩の姿を呈している。しかし、日野は近代日本の国民として、そして軍人として軍の命令により新疆に入った。このため、彼の詩には、政治や近代的な要素も含まれている。もっとも、このような要素は多くはない。1906年11月3日は日本の天長節（天皇誕生日）であり、当日日野は西安に近い渭南にいた。旅の途上であっても、天長節を忘れることなく、漢詩を詠み、天皇および日本国に対する忠実と情熱を綴っている。「旭日瞳瞳陰靄開、晴光自覺興情催。天長佳節遠征客、万里遙稱万寿杯。生路山川处处新、紅楓亦似百花春。渭南正值天長節、遙望東瀛拜紫宸」と¹⁵⁾。蘭州から甘州までの途中で砂漠の中に電柱が立つ風景を見て、「電柱杳重如束筍、沙堆起伏似狂波」と吟唱する。この「電柱」は、モダニティの符号として現れている。このようなモダニティの符号は中国古詩の中には存在しない。

3 『新疆瓊瑤』の中の日本認識と日本期待

途上の旅人である日野強にとって、漢詩を綴ることは単なる叙事、景色の描写と抒情の手段に留まらず、沿道の中国人官僚や名士との交際的手段でもあった。彼は沿道の官僚や名士に漢詩を贈り、そして相手に詩作を求め、相手も詩で応酬する。このようにして漢詩創作において相互に影響を与え合った。『新疆瓊瑤』に収録された漢詩は多くて、76首にも達する¹⁶⁾。清朝末期の中国の詩壇、特に新疆の詩壇においては、この76首の漢詩は重要な位置を占めるに違いない。

この76首の漢詩は日野の漢詩への唱和により生まれたものであり、日野の漢詩の延長線上にある。異なる詩人の創作の因果関係から見れば、これらの詩作は日野の漢詩の生産力と影響力を示している。そのうち、樊増祥と李溶の2首は、特にその典型的な例となる。日野が清末中国で交際した官僚や名士は科学時代の人物のため、文章の基礎がしっかりしており、『新疆瓊瑤』中の詩の芸術の水準は比較的高い。樊増祥と李溶の詩は、日野の詩の韻律を踏むという前提があるにも関わらず、イメージは清新で、リズムは流暢である。特に李溶の七絶は日野の原作の韻律を踏むだけでなく、1、2、4句の尾字の「遊」「頭」「流」も原作と重なる。これほど高い詩の技法は普通の詩人の及ぶところではない。

詩の内容の面では、『新疆瓊瑤』に収録された詩作に関してまず検討すべきなのは次の問題である。これらの詩は日本人の客である日野を対象とした唱和詩であり、そして折々日野個人のイメージと日本のイメージとが重なり詩のモチーフとなり、賛美或いは同意の対象になっている。それでは、中国人詩人が語った賛美と同感は、どのような内容を含んでいるのだろうか。ここで最も代表的な二人の詩人の3首の作品を対象として分析を試みる。

最初は聞端蘭の1首を取り上げる。署名は「鄞県聞端蘭」とあり、鄞県は浙江省にあるため、浙江

省の出身で新疆で勤務する者と思われる。詩は七律である。

海色遥涵白日東、扶桑將相盡英雄。伊藤變法熙
臣績、榎本治軍慮國忠。顧我老無經世策、知君
才是濟時功。天山南北搜羅富、歸去酬勲禮益
隆。（「熙」は賑やか、多いの意味）

二つ目と三つ目は、段子麟の2首である。署名は「署伊犁綏定県事段子麟」（伊犁署綏定県知事の段子麟）とあり、2首の詩は共に七律である。

本是蓬萊島上仙、須臾繞遍地球門。千旬駭浪人
穿海、万里乘槎客到天。列宿心胸羅廿八、涵空
世界覽三千。歸時取展新図看、袖有神輿数点
煙。

欣從海外晤名儒、可是徐公返故郷。腹在漢唐三
代事、胸藏瀛海九州図。微官匏系貧如洗、異國
文同德不孤。莫厭辺城荒落甚、且聽好鳥尽提
壺。

以上の3首の詩から、中国の詩人たちの日本への同感、賛美の理由を三つ挙げることができる。一つ目は、明治維新の成功と近代国家の建設である。聞端蘭の言う「扶桑將相盡英雄」は、日本の文官と武將を共に肯定している。第3、4句の「伊藤」と「榎本」は、伊藤博文（1841-1909）と榎本武揚（1836-1908）を指している。いずれも近代日本の重要な地位を占めた大物であり、明治維新後の日本が近代国家として躍進する過程において大きな役割を果たした。二つ目は、「同文同種」のこだわりと誇りである。段子麟は、詩の前の序の中ですでに「日本與中国同文同種」（日本は中国とは同文同種である）と記し、詩の中で再び「異國文同德不孤」と記す。繰り返して「同文同種」を強調するわけだ。『新疆瓊瑤』に収録された他の中国人の詩の中で、「同文同種」を詠う句は至るところに現れる。瀟湘の毛英良の詩句「盛世書車文軌同」（「書同

文車同軌」の出典から）、李溶の詩句「異國同文字句香」、また楚南資水の高烈の詩句「温帶地聯同種誼」、これらはいずれも日中両国の「同文同種」を強調する。三つ目は、歴史上の両国の長きにわたる友好的な往来である。先の引用の通り、段子麟は詩の中で中国を遊歴する日野を里帰りした徐福に例えているのだ（「可是徐公返故郷」）。つまり、徐福の渡日と「日本の徐福（日野）」の来中は友好の循環を形成している。古羅の蔣光昇の七律詩の句「政府淵源崇聖教、学界宗旨重儒流」は、日中両国の儒家文化伝統の同一性を述べている。

中国側の詩人が日本を賛美し、同感を抱いたのは、国家の近代化、人種、文化交流の歴史などの理由以外に、日露戦争後という特殊な時期における平和への期待もある。

『新疆瓊瑤』の漢詩に描かれた日野強の像は完璧で偉大である。李方学の句「本来偃武復修文、不重當時王右軍」は実に高い評価である。「偃武」の前提は「武」に長けていることであり、日野が文武両道の人物であることを詠んでいる。そもそも、古代中国では、「文武両道」は優れた人物の条件であった。それだけではなく、李方学の目を見た文士としての日野は、「筆精妙入神」（筆力は熟達で妙趣は入神の域に達する）の王右軍と肩を並べることができるのだ。「不重當時王右軍」の「王右軍」は、李白の詩「王右軍」の主人公であり、李白は王右軍を「筆精妙入神」と称賛していた。日野が中国の詩人たちから贈られた詩には、このような賛辞が多く、「国士」「名士」「大家」「万人敵」（万人に勝てる）「軍中帥」（軍中の帥）などの言葉は日野を文武両道の偉人に作り上げている。つまり、中国の官僚と名士が日野を称賛し、共感を抱いたのは、彼の「日本人」という身分のほか、また彼の人柄と才学に感服したからである。

「日本」と「日野強」は、『新疆瓊瑤』の詩作に新しい主題をもたらし、より含蓄のあるものへと変えただけでなく、詩の美的形態や言語形式などの面においても新しい要素をもたらした。詩の美的形態に

関して言えば、中国側の作者は、海に囲まれた国日本から来た日野を主人公、或いは抒情の対象とするため、海や島国に関連する「蓬萊」「扶桑」「瀛海」などの言葉を多用する。『新疆瓊瑤』の中では、同類の語、例えば「瀛洲」「瀛東」「東瀛」「蓬瀛」「大瀛」「海上」「重洋」「東海」などの語が到るところに挟まれており、中でも「瀛」という字が最も多い。これらの語は名詞であるが、それに関連する「渡る」「遊する」「乗る」などの動詞も使われている。新疆に身を置く作者にとっては、これらの語は一種の遙かなる距離を意味する。詩の中ではこれらの語は具体的な「意象」（イメージ）を呈し、詩の広い「意境」（内部空間）を作り上げた。さらに、作者はいずれも新疆で暮らす者のため、新疆の自然と風物をも詩の中に取り入れている。例えば、「天山」「雪山」「塞草」「塞外」「辺城」など。これらの「意象」は「東瀛」「海上」などの「意象」と合わさり、新たな組み合わせを生みだし、詩の「意象」は一層豊かになり、詩の内部空間も更に広がってゆく。詩の言語形式の面においては、日野及び日本は新たな空間、新たな物事に関わっている存在であるため、『新疆瓊瑤』の中の詩も自然と新たな空間と新たな物事を表現する語を用いることになる。先に引用した段子麟の2首の七律の1首目には、「地球」「世界」という二つの語が使われている。清末では、この二つの語はまだ広く使われてはいない。このような言語現象は『新疆瓊瑤』においてよく見られ、他には賀著の詩句「友邦盟約訂咸和」の「友邦」「盟約」、曾一鄂の詩句「名馳五大洲」の「五大洲」、高烈の詩句「製造新增宇宙花」の「製造」「宇宙」などもこの類の例となる。この種の語は多数の詩人の詩作の中に姿を現している。

日野は中国人から贈られた詩を『伊犁紀行』に編入する際、これらの詩作を「新疆瓊瑤」と名付けた。つまり、彼から見れば、これらの詩作は「瓊瑤」（美しい玉）のように貴重で悦ばしい作品であった。

むすびに——文学と思想及び国家が合流するところの漢詩

以上の通り、日野強は日本陸軍参謀本部の命令により新疆へ情報収集に赴いた。つまり、『伊犁紀行』はスパイ工作の成果として作られたのである。そもそも、近代知識の生産は近代国家の形成過程に密接に関わっており、或いは近代知識と近代国家とは共生するものと言える。だが、例えそのようであっても、知識生産そのものはやはり独立性を有している。『伊犁紀行』も同様である。この旅行記からは、近代的な知識の生産方式、個人と国家との関係、文学における国家的性質とモダニティーなど多種複雑な問題が幾重にも織り込まれている様子が見て取れる。『伊犁紀行』のこの複雑性は、日野の身分の複雑性の延長であり、2種の複雑性は互いに因果関係を持つ。『伊犁紀行』の豊富で複雑な内容は少なくとも日野強の三つの身分を示している。一つ目は豊富な従軍経験を持つスパイ、二つ目は歴史、文化、地理、自然に関する多様な知識の持ち主かつ生産者、三つ目は鋭い感知力と優れた表現力を持つ詩人、である。後者の二つは前者から生まれ、その延長線上にある。軍の命令に従い新疆へ情報収集に赴いた日野は、情報収集に従事すると同時に完成度の高い知識体系（この体系は地政学、民俗学、人類学など多方面の内容を含む）を形成し、膨大の漢詩を綴った。日野強にとっては、これは意味深い「自己矛盾」と「自我脱構築」であろう。

『伊犁紀行』においては、漢詩は明らかに日中両国の国境を消し、国家を超えた独立の文学の価値と文化の意義を持つ。膨大の漢詩は独立した内容として、実に大きな割合で『伊犁紀行』という著作の性質を変えた。19世紀初頭という近代国家が形成され、日中両国の文学が共に激変を迎える特殊な歴史的時期において、日野は旧詩の形式で新しい内容を表現し、旧詩の新時代における生命力を証明し、そして或る程度、同時代の日中両国の文学構造を変えた。これについては、さらに三つの方面から解釈で

きよう。

第一に、詩の創作と「消費」（読んで理解すること）の二つをもって完全な過程として捉えるのであれば、『伊犁紀行』の中の漢詩の全体は、「日本文学」或いは「中国文学」の概念で定義することはできない。とりわけ、日野の漢詩には唐詩を主とする中国古詩が直接的な影響を与えていた。また日野本人が綴った漢詩は、沿道の中国人官僚の詩作を促した。この影響／被影響の詩の創作過程においては、古人／今人、中国人／日本人は同一の詩の生産ラインの上にある。これらの詩作は「漢字文学」という概念でしか定義することができない。この「漢字文学」を日中両国の人間は共有するのだ。

第二に、中国人の詩作「新疆瓊瑤」が独立した部分として『伊犁紀行』に編入されたことは、『伊犁紀行』の全体の構造を変えた。日野が沿道の地理、社会、民族の状況を考察し、且つ漢詩を綴ったことを、日本を基点とする単方向の認知行為と感情表現として捉える場合、「新疆瓊瑤」の中の詩作は、日野の行動と声が中国人側の積極的な回答を受けていたことを示すのである。言い換えれば、『伊犁紀行』は「新疆瓊瑤」を取り入れることにより対話的な内部構造を創り上げた。そして、双方の対話関係の存在は「東亜」成立の可能性を表明する。或いは、部分的な「東亜」はすでに成立したとさえ言うことが可能である。そもそも、日野本人は自覚的な「東亜意識」を持っていた。彼は『伊犁紀行』の「序」で明確に述べている。「本書素と些々たる一小冊子、敢て西部支那を知るに足るとは云はす。唯々幾分の参考に供せられるを得ば幸甚。希くば有志の士之を西部支那研究の楷梯と為し益々其歩を進め以て東亜保全の大計に遺憾あること無からしめよ」（傍点は引用者による）¹⁷⁾。明らかに『伊犁紀行』の中で、彼が求める「東亜」（日中両国に限った部分的な「東亜」）はすでに別の作り手の漢詩により実体を持った存在となった。「新疆瓊瑤」の中の詩作は、日中共用の漢字という文化的道具により、「東亜」の漢字文学（漢詩）における実践の形式を呈し、さ

らに感情と価値観の面で直接的に中国側の作者の明治日本に対する善意と期待を表現した。このように考察すれば、日野強が「新疆瓊瑤」を『伊犁紀行』に入れたのは、彼本人の「東亜」に対する期待に基づいた行為であり、そして日本軍部ないし日本社会に彼の日中関係に対する理解を伝えるためであったと推測できる。近代の日中両国の間において、このような「東亜意識」は最も近代的なモダニティーであった。

第三に、『伊犁紀行』の中の日野自身が詠んだ33首の漢詩は日本文学として見なすことができる。これらの詩作は「文学」、すなわち「明治文学」であり、かつ「日本人の異国で創作した明治文学」であった。これらの作品を日本近代文学の枠組みの中に入れば、従来の固定された日本近代文学史に構造的な変化をもたらすことになる。

これまで『伊犁紀行』は文学のテキストとして読まれることはなく、また同書の中の漢詩に関する諸問題が重視されたことはなかった。皮肉なことに、『伊犁紀行』が1973年に芙蓉書房より再版された際、「新疆瓊瑤」は削除されている。このような削除は、無意識のうちの軽視、或いは意識的な抹殺、さらにはいずれの可能性もある。この削除行為には象徴的な意味が潜む。すなわち、漢詩および日野強が漢詩を通して表現した思想観念が、今日の日本人には理解されないことを象徴しているのではないか。あの世の日野が知れば、寂寞に耐えられないことであろう。

注記

- 1) 金子民雄『中央アジアに入った日本人』新人物往来社（東京）、1973年11月出版、165、166ページ。
- 2) 日野強の履歴は以下の二つの資料による。金子民雄『中央アジアに入った日本人』「小伝および参考文献」264—268ページ、『伊犁紀行』岡田英弘「解説」芙蓉書房、1973年2月再版。
- 3) 『日本人の冒険と探検』、白水社（東京）、1973年11月出版、377ページ。

-
- 4) 『中央アジアに入った日本人』 198 ページ。
 - 5) 『伊犁紀行』上巻、芙蓉書房（東京）、1973 年 2 月再版、44 ページ。本論の『伊犁紀行』からの引用はこの芙蓉書房版による。以下はページ数だけを記す。振り仮名は原文のままである。日野は中国の地名に読み方を注記する時、平仮名と片仮名を混用した。『伊犁紀行』中の漢詩は原文には返り点はあるが、引用に際して省略した。
 - 6) 『伊犁紀行』上巻 65 ページ。
 - 7) 『伊犁紀行』上巻 70 ページ。
 - 8) 『伊犁紀行』上巻 73 ページ。
 - 9) 『伊犁紀行』上巻 101 ページ。詩は四句「秦築長城比鉄牢、蕃戎不敢過臨洮、焉知万里連雲色、不及堯階三尺高」からなる。
 - 10) 『伊犁紀行』上巻 120 ページ。
 - 11) 『伊犁紀行』上巻 197 ページ。『磧中作』の中の「磧」は「砂漠」の意味である。詩は「七絶」の形式で、四句「走馬西来欲到天、辞家見月兩回圓。今夜不知何処宿、山川万里絶人煙。」からなる。
 - 12) 『伊犁紀行』上巻 280 ページ。
 - 13) 『伊犁紀行』下巻 41 ページ。
 - 14) 『伊犁紀行』上巻 70 ページ。
 - 15) 『伊犁紀行』上巻 69 ページ。
 - 16) 手元の芙蓉書房 1973 年版『伊犁紀行』は「新疆瓊瑤」を削除したため、「新疆瓊瑤」からの引用は中国語版『伊犁紀行』（華立訳、黒龍江教育出版社、2006 年 9 月出版）による。
 - 17) 『伊犁紀行』上巻 21 ページ。